

第 75 回 SVS Vascular Annual Meeting 参加レポート

東京慈恵会医科大学 外科学講座 血管外科分野
福島 宗一郎

この度、私は光栄にも第 50 回日本血管外科学会（以下 JSVS）学術総会で「大動脈瘤に対する新たな血管内治療 strategy：幹細胞 Fiber を用いた瘤壁での組織修復/再生は可能か」と題する演題を発表し、最優秀演題賞を受賞した副賞として、JSVS の費用支援のもと第 75 回米国血管外科学会（以下 SVS）Vascular Annual Meeting（以下 VAM）に参加させて頂きました。これは JSVS 前理事長である名古屋大学 古森公浩教授のご尽力により始まった制度です。今回このような貴重な経験の場を頂きましたことを、古森教授ならびにご尽力されました方々にこの場を借りて深く感謝申し上げます。以下、学会参加概要につきまして報告致します。

第 75 回 VAM は、マサチューセッツ州ボストンにある Hynes Convention Center で開催されました。学会は現地での対面式に加え、重要セッションのみ Web 配信を組み合わせたハイブリッド形式での開催でありました。日本から学会現地参加のハードルは高く、ワクチン接種証明に加えて出国・帰国時には 72 時間以内の新型コロナウイルス PCR 検査陰性証明が必要であり、検査結果によっては隔離対象となる可能性もありましたが、なんとか無事に陰性証明を取得し参加することができました。

今回私は SVS の International session で口演発表をして参りましたが、学会は朝 6 時 30 分からセッションが始まり、夜は様々なレセプションが行われるタイトなスケジュールでありました。英語で容赦ない質疑応答が目前で繰り広げられる中、私自身も準備をして発表に臨みましたが、想定通り自らの英語力の低さを痛感しつつ 10 分間の発表を終えました。発表後にフロアから質問を頂きましたが、その場にいらっしゃった旭川医科大学 東信良教授から、質問者が 2016 年から JVS の editor-in-chief を務めておられた Dr. Peter Gloviczki であったことを発表後に伺いました。私は同氏の顔や名前は紙面や学会でお見かけし存じておりましたが、SVS の大御所を前に見事に認識せぬまま質疑応答を終えておりました。質問を頂いたことは光栄でありましたが、同時に自分の浅学非才ぶりを痛感しました。また私の発表時の座長は、私が所属する東京慈恵会医科大学血管外科の大木教授が米国 NY 在籍時に指導された Dr. Palma Shaw でした。発表後に彼女から大木教授の近況を聞かれた際に、会話の冒頭で”私は血管外科のすべてを彼から教わった”と仰っておられ、日本から遠く離れた米国の会場で改めて大木教授の人脈や足跡に驚いた次第です。

学会では東教授が JSVS を代表して distal bypass workshop の取り組みを発表され、大変高い関心を集めておられました。また米国の学生やレジデントも主会場で発表しておりましたが、会場全体で発表する若手医師や学生を応援する風潮があり、大変良いカルチャーであると感じました。そのほかにも様々な新しいデバイスや、慢性解離に対する fene/branch の治療成績、COVID-19 関連の研究発表、また各発表後の毎回の質問者の行列など、日本の学会・文化との違いを少しだけ肌で感じる事ができました。

他にも多くの貴重な学びがあり、SVS 参加を通じて大変貴重な経験をさせて頂きました。これもひとえに JSVS の発展にご尽力されてこられた諸先生方、日々御指導頂いている大木教授、また共に働いている慈恵医大血管外科スタッフのお陰であり、皆様に改めてこの場を借りて深く感謝申し上げます。

以上、SVS VAM の参加報告とさせていただきます。

写真 1. 現地会場風景

写真2. 発表後の集合写真 (JSVS 理事長・旭川医大 東教授、座長一同と)

